

かささぎ通信 第121号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2023年 1月 13日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二三年十二月の「森三郎の作品を読む会」では、「菊の花」(『赤い鳥』[1933.6]所収作と『国民文芸選』「かささぎ物語」[1942.8](帝國教育会出版部所収作)の読み比べをしました。その後「波の鼓」(『うぐいすの謡』[1943.8拓南社]所収)を読みました。

「菊の花」は京の都のあるお公家様の坊ちやまが菊を育てる話です。叔父様からもらった根を裏庭に植えて、大事に世話をし、秋には大きな白い花を咲かせることができました。坊ちやまはうれしくて始終菊のそばで遊んでいました。ある朝、庭師のおじいさんが菊のそばに転がっている夜露に濡れたコマを見つめます。昨日まで坊ちやまが遊んでいたコマです。「そんなコマ、もう飽きちゃった」という坊ちやまから、おじいさんはコマをもらいます。しばらくして坊ちやまの一家は新しい家に引っ越しをすることになり、庭の樹木も掘り起こされて運ばれます。もう坊ちやまに見向きもされなくなってしまった菊の花が、人の心配がなくなった庭に取り残されます。庭師のおじいさんはまだ数日はもちそうなの菊の花を根もとから切り取って家に持ち帰ります。そして家で病床についている孫息子の枕元に飾ってやりました。男の子の手には、先日のおのコマが大事そうに握られていました。

一つの事に夢中になっている時の無邪気な姿、しかし新しいことに関心が移るとそれまでの興味をあつさりうち捨てていく姿は少年期の一つの特徴を表していると言えるかもしれません。それを元気あふれる少年と病弱な少年、身分の高い家の子どもと貧しい家の子どもという対比で描いた手法は、これまで読み比べて来た「梅の木」(『かささぎ通信』[17号]・「笛」(『かささぎ通信』[19号])に共通しています。しかも少年の変化を見つめているのは、少年が大切に思っていた菊の花であり、梅の木である点にも森三郎の描写の共通点がありました。

そのことは今回の(A)『赤い鳥』版と(K)『国民文芸選』「かささぎ物語」版との読み比べでさらにはっきりと感じられました。庭師のおじいさんが孫の枕元に菊を飾った最終場面の表現を比較してみます。

(A)では手にコマを握った孫とおじいさんが、菊の花を見て「ああ、きれいなお花だな。こんなお花を見ると、病気がよくなるやうな気がするよ。」「もうぢきだよ。今にすつかりなほつて、そのコマをまはして、あそべるやうになるよ。」と語る場面があり、その後で二人が寝ている姿を見おろす菊の花が描かれています。「少年の病気はなほるでせうか。半ばかさ〜にかわいた菊の花は、うすぐらくともつた鯨油の燭台の下で、おとろへはてた、そのあはれな子どもの寝がほをうなだれて見下ろしてゐました」で終わっています。一方(K)では、コマを握る少年の細い手をクローズアップした後、すぐに菊の花に描写が移ります。「少年の病気はなほるでせうか。くらい燭台の灯にてらされた男の子の寝顔を見守るやうに、菊の花はかさ〜にかわいてうなだれてゐました」と結ばれています。(A)では菊の花に残された時間は少年の命の短さを暗喩しているかのようです。(K)には(A)の二人の会話部分は省かれています。しかし少年の快復を願い、あのコマで遊べるようになってほしいという菊の願いは強く伝わってきました。『赤い鳥』で発表の九年後、時代は太平洋戦争の最中で、作者の気持にも変化があったのかもしれない。

次に読んだ「波の鼓」は心の奥に鳴り響く美しい鳴り物の音色を求め娘の話です。異国の難破船の中で生き残った母親が、息を引き取る前に長者夫婦に赤ん坊と家宝の「波の鼓」を託します。成長した娘はこの鼓の存在を知り、「これこそ私の求めてゐた音色です」と鼓を打ちながら、波に乗って去っていきます。作者自身は「あとがき」の中で、「波の鼓」は空想の所産、鼓という楽器が波の音に擬して作られたといふことから思ひつきました」と解説しています。「波の歌」が載っている『うぐいすの謡』は一九四三年発行ですから、状況は更に悪化していますが、戦時下でも美に対して慕わしい思いを持ち続けた作者の姿が伺えます。

次回予定 二〇二三年二月十日(金)午後一時半~三時半

①読み比べ「一人相撲」(『赤い鳥』[1933.7]所収作と『かささぎ物語』[1942.8]帝國教育会出版部所収作)

②「人まね小まね酒屋の狐」(『うぐいすの謡』[1943.8]所収)